転校生

前川美和

「もう出るよ。遅れてしまうわよ。早く」

「ちょっと待って」

お母さんが急かせるなか、さっきまで髪のリボンに手間取っていた美樹は、いまやっと、ソックスをはいている。

今日は新しく通うことになった学校の始業式なので、母と一緒に通学路を確かめながら歩く。四月に入り日差しは暖かだが、太陽が雲に隠れると急に肌寒さを感じる。低く広がる山すそをたどっていくと、小学校に着いた。

「小さい学校。木造校舎なんだ」

美樹はつぶやいた。見上げると、校門脇に植えられた桜の木から花びらがこぼれてきた。

母は職員室であいさつをして帰ってしまったので、美樹は始業式が終わって担任の先生が戻ってくるのを一人待っていた。リボンを

いじりながら窓に目をやると心細そうな女の子が映っていた。

「さあ、行こうか」と声をかけられたので、振り向くと、細くてやさしい目をした男の先生が立っていた。担任の中西先生の後ろにくっついて、ミシミシという廊下を足早に進むと、６Ｂという札のかかった教室があった。

ガラス戸を引き、教室に入ったとたん、好奇心いっぱいの五十六個の目に迎えられた。

「この子は小田美樹ちゃん。お父さんの仕事の都合で、町の小学校から転校してきたんだよ。仲良くしてあげてね」

中西先生は黒板に『小田美樹』と書きながら紹介してくれた。美樹はドキドキしたが、自分をはげまし、大きな声で言った。

「小田美樹です。城北小学校から来ました。小学校最後の学年に楽しい思い出を作りたいです。よろしくお願いします」

先生は同じ団地に住む安井のぞみの隣に座るように言った。

六年生のクラスが二つしかないこと、机やイスまで木で出来ていること、トイレの床がコンクリートで上履きを下駄にはきかえなければならないことなどにとまどいながら、一日が過ぎた。帰りは、団地から通っている高野玲子とのぞみと三人でおしゃべりしながら歩いたので、あっという間に家に着いた。昼ごはんを食べたら遊ぶ約束をした。

「お母さん、友達できたよ。のぞみちゃんと玲子ちゃん。二人とも町の学校から転校して来たんだって。昼から三人で裏山に登るんだ」

「そう、よかったね」

美樹は焼き飯をのどにつまらせながら食べてしまうと、待ち合わせの公園へ飛び出して行った。

三人そろうと、団地の裏にある小さな山に入っていった。美樹にとって山歩きは初めての経験だ。落ち葉が何層にも重なった山道は歩くとクッションのように柔らかで気持ちが

良かった。入り口付近は木がたくさん生えていて薄暗かったが、登っていくにつれ、開けてきて明るくなった。どこからか鳥の声がした。頂上から、三人の暮らす四階建ての団地が同じ方向にきれいに並んでいるのが見えた。全く同じつくりの何百という小さな部屋の一つ一つにそれぞれ異なる家族が生活していると思うと不思議な気がした。

山から下りて誘われるまま、玲子の家に寄った。鍵を開ける玲子に、

「お母さんは？」と聞くと、

「わたしのお母さん、働いてるから、家に昼間だれもいないの」

と言って、自分で焼いたアップルパイを切ってくれた。美樹とのぞみは

「うわあ、お店で売ってるのみたい！」

と手作りパイのあまりのおいしさに驚くと同時に玲子が自立している様子に感心した。

翌日学校に行って座っていると、A組の生徒が美樹を見にやってきた。窓からたくさん

の顔がのぞいていて、動物園のパンダになったようで落ち着かなかった。

それからの学校生活でも何かと注目された。クラスの皆が答えられない質問に正解すると、感嘆の声が上がったし、跳び箱で飛びそこなってけがをしたときは、三人がかりで保健室に連れて行かれた。消毒してもらっていると、クラスの子が何人も保健室にやってきた。

のぞみの家に遊びに行ったとき、

「なんか疲れるわ」

とため息をついていると、

「気にしなくてもいいよ。わたしも転校してきてすぐは妙にちやほやされたわ。珍しいものでも見るみたいで嫌だった」

「そう、そう」

「でも、すぐ慣れるし、向こうもあきるよ」

ジュースを持ってきてくれたのぞみのお母さんは、青白い顔をして元気がないように見えた。

美樹の視線に気付いたのぞみは

「うちのお母さん、五年前に手術してから、体の調子があんまりよくないの」

と言うと、おばちゃんは

「のぞみがお風呂洗ってくれたり、洗濯物たたんでくれたり、お買い物にも行ってくれるから助かってるのよ」

とうれしそうに言った。美樹は近所の小児科の受付でアルバイトを始めた母の手伝いを少しもしていない自分が恥ずかしく、今日から風呂洗いは自分の仕事にしようと決めた。

のぞみの言ったとおり、暖かくなるにつれて、美樹に対する皆の関心は薄れてきた。美樹自身も新しい学校になじんできたこともある。すると、クラスの人間関係が少しずつ見えはじめた。地元の子たちは団地の子に心を許していないようなところがあった。ちょっとした習慣の違いや考え方の衝突があると、「あんたらは団地の子だものね」と目が言っていた。

団地の子はクラスに四人。美樹たち三人と達也という気の弱そうな男の子だ。皆の前で意見も言えて、行動力もある玲子がリーダー的な存在だ。四人で帰ることが多かったが、達也は女の子たちにしょっちゅうからかわれていた。その中心になっているのも玲子だった。

地元のリーダーといえば、一年生のときからずっと学級委員をしている坂下君だ。小柄だけれど、頭もいいし運動も出来るし、人の言い分をよく聞いて皆をまとめられるタイプで、クラスの信頼を得ていた。

女の子では岡本明菜が目立っていた。おしゃれだし、走るのも速いし、ピアノも弾けて、時々中西先生の代わりに伴奏もした。目をクルクル回しながらよくしゃべり、勉強はあまりできるほうではなかったが、地元の子は男の子も女の子も一目置いていた。

その明菜がなぜか美樹に近づいてきた。休み時間になると、美樹の席にやってきて、ア

ニメやアイドルの話を一方的にしゃべっていった。玲子とのぞみは

「明菜ちゃんは気まぐれだから気をつけたほうがいいよ。この前A組に転校してきた女の子にも引っ付いて世話を焼いてたけど、しばらくしたら、あきちゃったみたいで、ちっともかまわなくなって、その女の子かわいそうだったよ」

「そうなの。何でそんなことするのかな」

と美樹はポツリと言った。

ある水曜日、普段は給食を食べたら帰るのだが、その日は講堂で音楽の聞き取りテストがAB合同で行われた。放送を聴きながら、流れてくるメロディーを音符に書いたり、和音をつける問題で、正解の記号を選ぶテストだったが、美樹は音符も読めなくてチンプンカンプンであせっていた。その時、自分のテストを出しに行った明菜が美樹の机の横に立った。そして、答えの記号をひとつひとつ指で示した。

「えっ？」

と顔を上げると、明菜は平然としていた。テストなのにと思いつつ、教えてもらった通りに丸をつけて出した。明菜は満足そうに微笑んでいた。

次の日、テストを返してもらった。九十点もあったけれど、自分の力じゃないから全然うれしくなかった。明菜はこっちを向いて目だけ笑っていたので嫌な気持ちになった。

それ以来、美樹は明菜をなんとなく避けるようになってしまった。先生に本当のことを言わないといけないと思ったけれど、言い出しにくくて二、三週間悩んだ末、職員室の先生のところに行った。

「あのテストの答えは教えてもらって書きました。すみません」

とあやまると、

「そうか。気にしなくてもいいよ。これからは自分の力でやろうな」

と言ってくれたので、ホッとして心がとて

も軽くなった。

明菜とは相変わらずぎくしゃくとした日々が続いていた。そんななか、思いがけず美樹とのぞみと玲子が地元の女の子二人とともに明菜の誕生日に招かれた。団地三人組みは

「どうして呼んでくれたんかな？まあ、いいかっ。プレゼント、持って行かなくちゃね。何がいいのかな？」

「キャラクターつきのハンカチは？」

「そんなの、いっぱい持ってるよ。やっぱ手作りがいいよ」

ああでもないこうでもないと言い合っていたら、いきなり玲子が

「わたし、シュークリーム焼くわ」

と宣言した。

「えっ、そんなの作れるの？」

「簡単だよ」

「じゃあ、わたしはお財布縫ってみる」

とのぞみ。

「わたし、ケーキも作れないし、裁縫も下手

だし、どうしようかな・・・。あっ、そうだ。明菜ちゃんの好きなアニメのキャラクターの絵かいてあげよう」

と美樹もプレゼントを決めた。三人はそれぞれ家に帰り、一生懸命手作りして、可愛くラッピングし、少しおしゃれをして明菜の家に向かった。

小学校で待ち合わせをして連れて行ってもらった明菜の家は、旧家の大きな家で、立派な門をくぐり、松などが植えられた庭を通り、玄関に入ると土間があった。靴を脱いで上がると、広い畳の部屋がいくつもあった。昼間なのに薄暗くて一人でいると怖いだろうなと思いながら、団地の小さな部屋しか知らない美樹はその広さと重々しさに圧倒された。通してくれた部屋には地元の女の子、山田ひろ子と森川ふみがもう座っていた。

さっそく皆が明菜への誕生日プレゼントを出した。明菜はひろ子とふみの持ってきたキャラクターの付いた赤いペンケースとピンク

の髪留めをうれしそうに受け取りながら、アニメの話をしはじめて、皆それぞれ自分の好きなキャラについて熱く語り、盛り上がった。

続いて、団地組三人の手作りプレゼントの番だ。おいしそうにふくらんだシュークリーム、赤いフェルトに花の刺繍をした財布、色鉛筆でそっくりに描かれたアニメのヒロインに皆目を輝かせた。一人ひとりどんなふうに作ったのか説明していると、昼ごはんのチキンライスが出てきた。

明菜の家は農家なのでお父さんもお母さんも朝早くから夕方までいないことが多いらしい。今日も田植えで忙しいので、高校生のお姉さんが作ってくれたようだ。何も入っていない赤いごはんがお皿にこんもり盛られている。一口食べてみたが、明菜も含めた六人が顔を見合わせるほどの代物だった。色は付いているが、味がしないのだ。女の子たちはせっかくお姉さんが作ってくれたごはんを残すわけにはいかないと、必死でおなかに詰め込

んだ・皆涙目になりながら、はげましあって完食した。

その日以来、明菜やひろ子たち地元の子との距離が近づいて仲良くなれた気がする。

団地には生活排水も流れ込む小さい川が山のすそ野に沿うように流れている。その川にはフナや小型の魚がたくさんいた。初夏の晴れた日、美樹と玲子とのぞみは、達也も誘って、網とバケツを手にフナ捕りに行った。いつもはからかわれてばかりの達也だが、フナが集まる場所をよく知っていた。

「小さい橋が架かって陰になっているところにたくさんいるよ」

という達也にうながされ、川に下りた。川と言っても浅いので、ビーチサンダルをはいたまま入り、狙いをつけて網を下ろすと、割合簡単に捕れた。達也のアドバイス通り場所を変えながら網を振り上げ、夢中でフナを追っていたら、ズボンも下着もずぶぬれになっ

ていた。美樹はのぞみと玲子が捕まえたフナももらって帰って、たらいで飼うことにした。

「フナを飼うんだったら、川に生えてる金魚藻も入れてやったほうがいいよ」

という達也のひと言で、川の中で緑に揺れている藻も取ってきて、石ころの橋で日陰も作ってやった。

何日か後、美樹がフナたちのために新しい藻を取りに一人で川に行ったとき、片方のサンダルを流してしまった。川から出たり入ったりして捜していると、クラスの森君と木本君がやってきて一緒に捜してくれた。サンダルはずいぶん下流の岩陰に藻にからまっていた。森君が見つけてくれたときには夕闇が降りてきていた。森君は片方裸足でびしょびしょの美樹にサンダルを渡すと、

「また、明日な」

と言って帰っていった。次の日学校で

「きのう、ありがとうね」

と言うと、二人は恥ずかしそうに笑った。

九月になると、運動会の練習が続いた。最終学年の六年生は組体操を見せなければならないので、担任の先生たちも指導に力が入る。美樹は運動音痴で筋力もないので、支え倒立やサボテン、ブリッジのような腹筋を使うものは何回も失敗して辛かった。全員出場する種目以外の「借り物競争」「パン食い競争」「クラス対抗リレー」に関しては学級会で出場者を決めることになり、坂下君を中心に話し合いが行われた。最初に

「どれかひとつに出ないとだめなんだから、出たいものに出たらいいんじゃない？」

という意見が出て、皆も

「そうだ、そうだ」

と賛成した。それで、出場したい種目に手を挙げるようにしたところ、「パン食い競争」に人が集中し、「リレー」には二人しか集まらなかった。あとはじゃんけんで決めようということになった。不安気に話し合いを見守っていた美樹はたまらず、スッと立ち上

がって発言した。

「わたし、走るの遅いから、リレーの代表になったら、とても困る」すると、

「そんなのわがままじゃない。じゃんけんで決めるのは平等でしょ」と反撃された。

「平等そうに見えるけど、ほんとにそうかな？運動が苦手で足も遅いわたしがリレーに出ることになったら、プレッシャーで運動会が楽しくなくなる。好きなもの嫌いなもの、得意なこと苦手なこと、人それぞれ違うでしょ。やっぱりクラス対抗リレーには早く走れる人がクラスの代表として出て欲しい。わたしは一生懸命応援したい」

いつもは発言しない絵里が美樹に賛成してくれた。

「わたしも走るの苦手だから、リレーに出て、皆の足引っ張りたくない」

坂下君も

「じゃんけんで仕方なくリレーに出ることになっても、いい結果が出せなかったら、責任

感じると思うな。男子五人、女子五人、リレーに出てやろうという人いませんか」

と皆に振ってくれた。すると、

「オレ、出る」「わたし、やるわ」という子が次々出てきた。男子選手には坂下君、森君、木本君たち、女子選手には玲子、明菜たちが決まった。クラス対抗リレーではAとBの担任の先生も勝つ気満々で、走る順番に工夫をこらし、バトンのつなぎ方の練習にも余念がなかった。

運動会当日は、どの学年もクラス対抗リレーで燃えた。選抜選手十人がクラスの期待を担って必死に駆けた。授業中当てられても、答えられずモゴモゴ言ってる森君や木本君が、真剣にさっそうと走る姿に目が釘付けになった。かっこいいと胸がときめいた。応援する側も走者の名前を大声で叫び、声が枯れてしまうほどだった。最後の演目である組体操も大きなミスもなく無事やりとげ、多くの拍手をもらい、何か誇らしい気持ちになった。

秋も深まり、十一月には六年の最後を飾る京都への修学旅行があった。女の子たちの関心はまずファッション。何を着ていくかが話題に上った。のぞみは一人っ子でいつもお父さんが彼女の服を見立てて買ってきてくれるそうで、今回もお父さんがジーンズのジャケットとスカートを用意してくれたらしい。玲子はチノパンとTシャツ、明菜はアンサンブルスーツを買ってもらったようだ。美樹はお母さんが忙しい時間を割いて、ブラウスとスーツを縫ってくれた。美樹の母は若い頃洋裁を習ったので、美樹の着るものはたいてい縫ってくれる。家が裕福でないこともあって、ズボンのひざが破れると、アップリケでつぎを当ててくれたし、ソックスに穴が開けばつくろってくれた。美樹にすれば、いま流行の既製服を着たい気持ちもあったが、母の手作りの服を身につけて旅行に行った。

京都では金閣寺をはじめ有名な観光地を巡り、おみやげを買うのも楽しかったが、修学

旅行の醍醐味は皆と一緒に旅館に泊まるということだ。向かい合わせに並んで旅館のごはんを食べ、いくつかのグループに分かれてお風呂に入った。お風呂に入るとき、裸になるのには抵抗があったが、「えいやっ！」と脱いでしまえば、どうってことはなかった。キャーキャー言いながら、ひざくらいしかない、薄汚れた湯船に飛び込み、バタ足をしたり、お湯を掛け合ったり大騒ぎ。入浴時間は二十分と決められていたので、大急ぎで髪と体を洗ってバタバタと上がった。

眠る部屋は四、五人ずつ割り当てられていたが、互いの部屋を行き来して、お約束の枕投げに興じた後、女の子たちは恋愛話になった。明菜は

「わたし、木本君にラブレターもらってから文通してるの」

「えっ？同じクラスで毎日会うのに？」

「うん、なんか日記みたいな感じよ。その日したことととか思ったことととか・・・。木本君

て冗談ばっかり言ってるけど、意外に真面目だよ。そういえば、A組の吉井君、美樹ちゃんのこと好きだって言ってたよ」

「吉井君って、いつも髪の毛気にしてるイケメン？」

「そう、そう」

「話したことないし・・・」

「この旅行で告白されるかもよ」

「ええ？わたしは・・・」

すかさず玲子が

「だれか好きな子、いるん？」

「わたし、森君がいいな」

すると、皆意外そうに

「森君って、あの無口な子？」

「うん。無口だけど、優しいよ。足だって速いし・・・。玲子ちゃんはいつも達也君をいじめてるけど、ほんとは好きなんとちがう？」

「まさか！あんな弱虫、いやよ」

玲子のきつい言葉にのぞみが言い返す。

「だけど、達也君家、母一人子一人で、達也君、お母さんのこと大切にしてるみたいだよ。時々ごはんも作ってくれるっておばちゃんが話してたんだって。お母さん言ってた」

「へえ、そうなんだ。いいとこあるんだね。でも、やっぱりクラス委員の坂下君がいいな。リーダーシップあるし、頭もいいし」

と玲子。絵里まで

「そうそう。やっぱ坂下君よ」

と坂下人気は高い。

一方、男の子はというと、ひたすら枕ぶつけを楽しんでいる。坂下ひきいるチームと木本がボスのチームが枕をボールにみたてて、ドッヂボールのゲームを繰り返していた。あまりドタバタするので、先生たちに叱られて、一時シュンとなっていたが、しばらくすると、枕積みの競争に夢中になり、結局ＡもＢも入り乱れて枕投げの大騒ぎになって、先生たちに監視されつつ眠らざるを得なくなった。遅くまで遊んでいたので、翌日のバス観光では

居眠りする男子が続出した。

年も明けて、卒業式を間近に控えた三月のある午後、Aクラスのむつみが B組に飛び込んできて、

「わたしたちA組の女子は男子と絶交した」

と言い放った。

「どうして？」

と皆口々に尋ねると、

「A組のゆかちゃん、知ってるでしょ？」

「うん、おとなしそうな子でしょ？」

「そう。そのゆかちゃんが吉井君にラブレター渡したみたいなの」

「うわあ、大胆！」

「そうなんだけど。そのラブレターを吉井のやつが男子みんなと回し読みして笑ってたのをゆかちゃんが知って、ゆかちゃん、泣いて帰ろうとしたの。わたしたち、ゆかちゃんを引き止めて、何があったのか聞いて、吉井も男子も許せないって思った。それで、吉井の

ところへ言って、ゆかちゃんに謝るように言ったんだけど、ヘラヘラしてて話しにならないの。男子も皆笑ってるだけだし・・・。女子全員めちゃめちゃ怒って絶交することにした」

それを聞いた明菜は

「信じられないわ。男子ってほんと子どもすぎる。女の子の気持ち全然分かってないわ。ゆかちゃん、かわいそう。B組の女子も男子と絶交するわ」

と言い切った。そばにいた男子の顔にはハテナマークが貼りつき、美樹もどうしてB組まで絶交するのかと思ったが女子の怒りは伝染し、控えめなひろ子ちゃんまで

「あのおとなしいゆかちゃんが思い切って告白したのに・・・。女の子の気持ちを傷つけるなんて最低よ・絶対絶交よ」

と鼻息も荒い。玲子も

「だいたい男子って無責任よ。掃除も真面目にしないでサボってばかり。絶交、絶交」

と叫び、女子全員で妙に興奮して、周りでどうなるのかと見守っていたB組男子を前にして

「B組も女子は男子と絶交します」

と宣言した。B組男子は

「おれら、何もしてないのに、なんで絶交とか言われなきゃいけないんだ。意味分からんけど、そっちがその気なら、おれらも絶交だ」

ということになり、六年の女子対男子のバトルの火ぶたが切られた。

女子はすぐに行動を起こした。

まず、女子が給食当番になって、おかずを配分するとき、男子には少ししか入れてあげなかった。男子は毎回お代わりするために、自分で席を立って、おかずをよそいに行かなくちゃならなくなった。

次に、教室の掃除も教室を半分に区切って、女子は半分だけやったら、さっさと帰ってしまい、男子が最後のゴミ出しまでしないとい

けなくなった。

一番問題になったのは、体育の授業前後の着替えだ。以前はAの教室で男子、Bで女子と分かれて着替えていたのだが、バトル勃発後、女の子たちはAもBも前の授業が終わるやいなや、一斉に男子を追い出し、窓も戸も閉めて鍵をかけてしまった。そして、わざとゆっくり着替えるので、男子はなかなか着替えられず、体育の授業に遅れて叱られるはめになった。男子が先生に助けを求めたので、六年生全体で話し合うことになった。

初めに、むつみがゆかの事件を説明した後で、ゆかと吉井、双方の言い分を聞くことになった。ゆかは恥ずかしそうに、でも、しっかりとした口調で言った。

「わたし、ずっと吉井君のことが好きだった。もうすぐ卒業で中学校に行ったら皆バラバラになってしまうから、その前に自分の気持ち、伝えたかったの。どうしても直接口で言えそうにないから、手紙書こうと思った。

一生懸命考えて、何度も書き直してやっとできた手紙、勇気を出して吉井君に渡した。とっても恥ずかしかったけど、わたし皆と違う中学行くから最後のチャンスかなって・・・。なのに、吉井君は・・・」

「オレ、同じクラスの女の子から手紙渡されてびっくりした。あんまり話したこともない子だったし・・・。手紙受け取ってるところを鈴木君に見られてしまって、何？何？ってうるさく聞くもんだから、見せてしまったんだ。そのうちに皆次から次に集まってきて、手紙、取られてしまって・・・」

玲子がきつい調子で尋ねる。

「吉井君、ちゃんと手紙読んだ？」

「うん、一応」

「そしたら、ゆかちゃんの気持ち、分かったんじゃない？その手紙はゆかちゃんが吉井君だけに読んでもらうために一生懸命書いた手紙でしょ？」

「オレ、正直ちょっと困ったんだ。ゆかち

やんのこと特に好きじゃないし・・・」

「そういう問題じゃないのよ。ゆかちゃんの真心はしっかり受け止めるべきでしょ。それから、ゆかちゃんに自分の気持ちをはっきり直接伝えなくちゃいけないんじゃない？」

明菜も責める。

「そうよ。それを皆で回し読みするなんて、無神経すぎるわ。吉井君も自分の書いたラブレターがそんなふうにされたらどうする？平気なの？」

「・・・・・・」

むつみはホコ先を鈴木君に向ける。

「鈴木君も悪いよ。吉井君への手紙を見たがるなんて悪趣味だと思うよ」

「ボク、気になったから。ゆかちゃんが何て書いたか知りたかったから」

「知ってどうだった？他の子に見せておもしろかった？」

「ボク、ちょっとショックで・・・。何か腹立って・・・」

ゆかが鈴木をかばうように言った。

「わたし、自分の気持ち伝えたかっただけ。もちろん吉井君もわたしのこと好きだったらすごくうれしいけど・・・。だめでも仕方ないよ。ただわたしにだけ言ってほしかった」

「ごめん。オレ、ひどいことした」

「ボクも意地悪だった。ごめん、ゆかちゃん」

吉井君も鈴木君も素直に謝った。他のA組の男子たちも

「ぼくらも皆おもしろがって、ひやかしてごめん。ラブレターってどんなものか興味あったから、つい・・・」

と反省の弁。そこで、坂下君が

「吉井君も鈴木君もA組の男子もよくなかったけど、これはプライベートな問題だよね。周りで女対男の戦いだとか絶交だとか騒ぎすぎたと思うな。おもしろがってたのは女の子も同じじゃないかな」

と指摘すると、あちらこちらかの女の子か

ら反省の声が聞かれた。すると、ゆかが口を開いた。

「吉井君たちも謝ってくれたし、みんなの気持ちもよく分かった。女の子たちはわたしのために怒ってくれたんだと思う。ありがとう」

美樹は付け加えるように言った。

「吉井君はもう一度ゆかちゃんだけにきちんと自分の気持ちを伝えたほうがいいよ」

絵里も同調した。

「心をもらったら、心で答えないとね」

吉井君は

「わかった。家に帰ったら、正直な気持ちを書いてみるよ」

と約束した。

結局、ゆかちゃんの恋は実らず、

「テストはがんばればいい点取れるけど、いくらがんばっても相手の心はつかめないんだな」

と説得力のあるひと言をもらし、ため息を

ついた。皆も恋愛ってなんだか難しいんだなと実感させられた。なにはともあれ、ラブレター事件は一件落着し、女対男のバトルも幕を閉じた。

卒業式は皆晴れやかに顔を上げて入場し、『思い出』と題するシュプレヒコールを披露し、別れの歌を歌った。坂下君、森君、吉井君たち男の子は笑顔で、美樹、りぞみ、玲子、明菜たち女の子はちょっぴり涙を光らせながら、在校生に見送られつつ学校を後にした。

六年という最終学年に町の学校から転校してきた美樹は、初めは注目されてとまどったが、豊かな自然に抱かれつつ、クラスメートたちといろんな思い出を作ることができた。以前に比べて、積極的に、少し大人になれたようだ。告白したりされたりするのは、またこれからのお話になるだろう。

〈了〉